言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　松木　栄三
論　文　題　目　　ロシア中世都市の政治世界　—都市国家ノヴゴロドの群像—
学位取得年月日　　2003年12月

本書が対象とする時代は、ノヴゴロドが君主の政治権限と機能を最小限に抑え、民会で選ばれる為政者が定期的に交代しながら執政する共和制的政治制度を発達させた12世紀前半から15世紀後半までのおよそ三百数十年である。ノヴゴロド共和制国家の運営において最も重要な政治的役割を分担した貴族、主教、公のなかから5人の個人ないしその家族を取りあげ、彼らが関与していた都市国家の政治の形態と社会の構造、それらが機能する仕方を叙述することに目標をおいている。しかし本書は政治史あるいは国家制度史そのものを意図するものではなく、対象とする諸個人およびその周辺の材料をできるだけ広く取りあげ、政治や対外関係に力点をおきつつも、中世ノヴゴロドの社会、経済、宗教、文化などを含め出来るだけ多面的に描き出そうとしたものである。

第1章　絵師グレチン

本章では、ノヴゴロド年代記と白樺文書にわずかな痕跡を残したギリシア人イコン絵師グレチンの活動と生涯の復元を試み、彼のような人物が12～13世紀のノヴゴロドとビザンツとを結びつけていた歴史背景の宗教政治的文脈を考える。

第１節　年代記と白樺文書のグレチン

12世紀末～13世紀30年代初めのノヴゴロド年代記にグレチンと呼ばれる聖職者が大主教の候補者に推されたりユーリエフ修道院の掌院に就任した記述、また同名の絵師がクレムリン城門教会の壁画を描いた事実を伝える叙述があるが、絵師のグレチンと聖界有力者グレチンが同一人物かどうかは不明だった。

しかし1974年に中世ノヴゴロドの街路、尼僧通りでイコン製作にたずさわる一人の絵師の工房や住居が発掘され、出土した白樺文書からその絵師がグレチンという名であることが判明し、年代記、考古学資料、白樺文書の三つの資料により一人のギリシア人の帰化人絵師の生涯を研究する可能性が生まれた。

第2,3節　イコン絵師グレチン

司祭が教会を飾るイコンを注文する白樺文書の手紙がグレチンの住居跡から発見され、彼が職業的なイコン絵師だったことが判明した。考古学資料はグレチンが12世紀後半から13世紀初めまでこの場所に住んだことを示し、年代記にグレチンが登場する時代の前半と照応する。

共和制的社会変革とも関連して12～13世紀のノヴゴロドには貴族、商人、ギルド、区、街区などが建立する木造教会や小規模な石造教会が多く、教会のイコンや壁画への需要も多かったであろうことがグレチンのような異邦人絵師を引き付けた社会背景をなしていた。

またグレチンの工房では家庭用ないし個人用の小型イコンの半製品やその製作にかかわる種々の原材料や道具も出土し、イコンの構図や描くべき聖者名を列記した白樺文書も多数発見され、彼がノヴゴロド市民の注文を受けて個人ないし家庭用イコンも作成していたことが判明する。

第4節　ギリシア人絵師

グレチンがギリシア帰化人だったことを示す状況証拠は、彼が頻繁に連字を使い、キリル文字でギリシア語の聖人名を書き、また屋敷から地中海のオリーブ油を運ぶアンフォラ陶片が多数の出土したことなどがある。

ノヴゴロド年代記の記録される３人の「ギリシア人」絵師のうち、フェオファン・グレクは正教圏各地を遍歴したが、12世紀のグレチンはノヴゴロドに定住し、名望ある聖職者として社会的地位を獲得し世紀末には大主教候補にも推薦された。

第5,6節　親ギリシア派

グレチン時代のノヴゴロドには彼やアントーニイなどビザンツ教会を手本に教会の整備に尽力した聖職者を教会指導者に選び、ノヴゴロドの政治的、文化的自立を企図する親ギリシア派の社会グループが存在した。

公にも同調者があり、大主教アントーニイは聖ソフィア信仰の確立を目標にスモレンスク公国出身のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ公と連携して活動した。

一度追放されたアントーニイは1225年に大主教に復帰し、同時にグレチンも掌院に選ばれるが、そこには親ギリシア派や大主教アントーニイの意向が働いたと推測される。

1229年にアントーニイが病気で引退するとグレチンは新大主教の選挙で再度候補の一人に推されるが籤にもれ、1231年の政変では掌院職も追われ幽閉されて死亡した。

絵師グレチンはキエフの政治的求心力が失われ、ノヴゴロドが独自の国家体制を完成させるべく自立教会の完成に力をそそぎ、ビザンツへの働きかけを強めていた時期に登場する。絵画を含め正教文化の諸要素は教会の完成には不可欠で、グレチンの帰化も、聖界の要職にギリシア人やギリシア派教会人を登用しようとするグループを生んだのも、そうした文脈と時代の流れが背景にあった。

第2章　公アレクサンドルとその一族

本章は、『ノヴゴロド第1年代記』や『アレクサンドル・ネフスキー伝』などを主な材料に13世紀のノヴゴロド公の機能と性格を検討する。モンゴルのロシア征服はノヴゴロド公のあり方の転換点になったと思われ、そのためアレクサンドルとその父ヤロスラフの2人に焦点をあてる。

第１節　ノヴゴロドの「公」

ノヴゴロドは12世紀以来民会で選ばれる市長に運営される共和制国家となり、他国から招かれる公は軍事・裁判機能を果たす傭兵隊長的な存在となる。ノヴゴロドは公を自由に選任・廃位する権利を確立し、公は頻繁に追放され地位は不安定化した。

ノヴゴロドは公の即位時の契約状でその支配権を制約した。契約状は公の行政権限を制限して市政府の主権を確保し、公集団のノヴゴロド領内での土地領主化を禁じ、同時に公が果たす機能に必要な収入を保証した。

12～13世紀ノヴゴロド公は周辺三公国の出身者だったが、次第にウラジーミル・スズダリ出身の公の比重が増大し、アレクサンドルの父ヤロスラフ（1230年）以後は完全な独占状態となった。

第2節　ヤロスラフの勝利

ノヴゴロドが公に期待した機能に軍事指揮があった。非専門兵士集団であるノヴゴロド市民軍の弱点は公とその騎兵部隊の戦争技術で補われた。ヤロスラフがライバルに勝ってノヴゴロドの公位を確保した一要因も、彼の軍団が市の軍事的必要に効率よく応えたことにあった。

ノヴゴロドが公を不可欠とした13世紀20～30年代の軍事緊張はドイツ騎士団、リトアニア、スウェーデンの三勢力によるもので、ヤロスラフはこれらとの軍事対決と領土防衛で成果をあげ、ノヴゴロド・スズダリ派の立場を強めて息子アレクサンドルの時代を準備した。

ノヴゴロドは穀物自給力不足という経済的弱点を抱えて東北ロシアからの供給に頼っていたため、輸入が阻止されると深刻が穀物騰貴と飢饉に襲われた。12～13世紀のウラジーミル・スズダリ諸公は穀物供給弁のコントロールをノヴゴロドでの公位の確保手段にした。これはノヴゴロドの政治的弱点ともなり公を排除しえない原因となった。

第3節　モンゴルのロシア征服

モンゴル軍の侵入でウラジーミル・スズダリ公国の諸都市は破壊されフセヴォロド三世の子孫の多くも敗死したが、ヤロスラフは生き残りキプチャク・ハン国の本営サライでバトゥに忠誠を誓い大公権を与えられ、後の東北ルーシ支配者たちの祖となった。

しかしヤロスラフは帝都カラコルムとサライの宮廷との政治的葛藤からバトゥ派として1246年にカラコルムで毒殺され、その対モンゴル協力政策はアレクサンドルに継承される。

モンゴル軍がノヴゴロド領に侵入したのはアレクサンドルが公となった翌々年だったが、バトゥ軍は市の手前で反転しノヴゴロドは奇跡的に破壊を免れた。アレクサンドルも父と同様、モンゴルへの服従を前提に西方の軍事侵入と戦う政策をとった。

第4節　川と湖での戦い

1240年のネワ川の戦いはノヴゴロドには重要だったが、後代の評価のような歴史的意味があったわけではない。ネワの戦勝の過大視は、アレクサンドルがモスクワ公国の始祖と繋りがあったことや『ネフスキー伝』の反カトリックイデオロギーに起因する。

ネワの戦勝のあとノヴゴロドはアレクサンドルを追放する。この事件の背景にはドイツ騎士団の進出に妥協しようとする反スズダリ派の権力掌握があった。しかし騎士団は露骨にノヴゴロドの利権を侵害したため親スズダリ派政権が復活し、アレクサンドルが呼び戻されて1242年のドイツ騎士団との戦闘が行われる。この戦闘の勝利は騎士団の領土的拡張をくいとめて西部国境を確定した。

第5節　2つの外交路線

大公ヤロスラフの死後、カラコルム宮廷はアレクサンドルではなく弟アンドレイにウラジーミル大公位を与え、アンドレイは1249年に大公位に就いた。だが新大公は親カトリック路線をとる南西ルーシのダニールと同盟し、もう1人の弟ヤロスラフとともに反モンゴル路線に踏みだす。

アレクサンドルはアンドレイとダニールの連合を契機にサライ宮廷に伺候してモンゴル懲罰軍の引き出しに成功する。結局、反モンゴル連合は1252年の懲罰軍で壊滅し、大公アンドレイはスウェーデンに亡命してアレクサンドルが大公位を受け取る。

第6節　公とノヴゴロド社会

ノヴゴロド公が日常生活を送り、政務を取った場所は市域内ではなく市郊外の小城塞

だった。公が都市の政治的、社会的中心空間から排除されていた事実はノヴゴロド公の政治的立場を象徴し、公の外来者的、2次的、外在的性格を示している。

また公が名乗る異教的「公名」もノヴゴロド人の異教名とまったく重ならず、リューリック一族としての公はその名でノヴゴロド社会と異質な特権的集団たることを記号化した。「公名」の洗礼名への移行はそれゆえ在地社会との融合化を意味し、アレクサンドル時代は転換期となった。

第7節　モンゴルの人口調査

アレクサンドルが大公になって3年後の1255年に反スズダリ派は大公の息子ワシーリイが追放して弟ヤロスラフを公に招くが、大公は大軍でノヴゴロドに圧力をかけ息子を復権させ市長をスズダリ派と交代させた。

大公は1257年にはサライで全ロシアの人口調査を命令され、東北ロシアでは調査に成功するがノヴゴロドでは抵抗にあって失敗し、翌1258年に再喚問されノヴゴロド調査を厳命される。大公は軍を動員しモンゴル人人口調査官とともに抵抗を押し切ってノヴゴロド調査を強制した。軍事破壊を免れたノヴゴロドも、こうしてモンゴル支配に組み込まれた。

第8節　大公の死以後

1262年に東北ルーシ諸都市が反モンゴル蜂起を起こして徴税に抵抗したため、大公は最後の宮廷伺候を行って懲罰軍を食い止めようとしたがサライで抑留され翌1263年に帰路で病死する。

13世紀末以後ノヴゴロドはモンゴルが認定する大公位受領者に一種の宗主権を認め、ハン任命の大公を自動的にノヴゴロド公と認知したからノヴゴロドには代官だけが派遣され公は存在しなくなる。この「宗主権」体制で公の権限は一層名目化し、反比例的に選挙による市長や大主教の政治に占める比重は高まり、貴族共和制は最盛期を迎える。

第3章　大主教ワシーリイ・カレカ

本章は、年代記、物語、書簡、聖地巡礼記などを材料に14世紀のノヴゴロド大主教ワシーリイの担った共和制国家での政治的役割や社会的、宗教的活動の特徴を概観するとともに、同時代のノヴゴロドが置かれていた国内的ならびに国際的な環境をも明らかにする。

第1節　ノヴゴロド大主教

大主教はクリムリンの宮廷に住み、諸公国では君主が果たすべき役割の一部を担い、独自の財政をもち、騎兵部隊（15世紀）を抱え、広範囲の国家機能を分担するなど「君主」のような外観をもった。

大主教は民会選挙で選ばれたが、民会は三人の候補者を推薦するだけで、三人を一人に絞ったのは聖ソフィア祭壇に置かれた籤であり、選出には人と神の意志が結合されていた。

大主教職の府主教による叙任は必要だったため、ノヴゴロドの教会と国家は府主教とその背後にいる大公への依存が避けられず、そのためノヴゴロドは早くから総主教に接近して教会独立を追求した。

ワシーリイは1330年に大主教に選出され、当時南西ロシアのヴォルイニに滞在中の府

主教フェオグノストに召喚され叙任のため出発する。途中でリトアニア大公ゲディミナスに会い、その息子ナリマンタスをノヴゴロド勤務公に迎えて代償を与える秘密条約を締結する。

このあと一行はヴォルイニのウラジーミル市で府主教フェオグノストとリトアニア大公支配下の西ロシア主教たちの出席で大主教に叙任され、1331年末にノヴゴロドに帰還した。

第2節　外交の舞台で

附属都市プスコフは同盟国リトアニアの力を借りてヴォルイニに使節を送りこみ、叙任直後のワシーリイと府主教にプスコフ教会の独立を迫る。しかしフェオグノストとワシーリイはこれを拒否する。

ワシーリイはリトアニア勤務公を迎える秘密条約でモスクワを抑えこむ切り札を準備する一方、プスコフの教会独立を拒んでリトアニアがプスコフにおよぼす影響力の拡大を阻止した。

ワシーリイの立場を親モスクワないし親リトアニアの何れかに色分けするのは誤りである。その政治行動は常に一方の側に加担する単純なものではなく、対立する二つの勢力を巧みに利用する現実的な政治感覚と柔軟な行動様式を特徴とした。

第3節　教会建設と調停と

大主教ワシーリイは国庫や聖ソフィア財源で盛んに教会建設を行った。国家シンボルたるソフィア聖堂の整備にも、外交、商業、社会基盤の復興など種々の社会的要請や動機をもつ教会建設にも財源を投入した。

大主教はクレムリン城壁、ヴォルホフ大橋、要塞など社会的公共性のある建設活動の財政を負担をしただけでなく、ソフィア政庁が抱える職人集団やスタッフを使い直接の建設も行った。

大主教の社会的機能の一つにノヴゴロドの地域政治単位の間の激しい権力闘争を調停する役割があった。５区間の紛争は有力貴族の権力闘争と民衆の社会運動とが絡み合ってしばしば流血沙汰に発展したが、ワシーリイを含め大主教は極限状態の対立の調停者機能を果たした。

第4節　天国は地上にあり

ワシーリイのトヴェーリ主教宛の手紙は、アダムが住んだ天国はすでに滅んだとするトヴェーリ主教を批判し、神が創造した地上の楽園はいまも実在するとし、その論証にノヴゴロド民衆の伝説的な「天国」目撃談を引用するなど、素朴で民衆的な現実感覚を感じさせる。

このワシーリイの手紙は、彼が司祭出身で商工業者に同情的だったとしてストリゴリニキ異端と結び付け解釈されたり、ビザンツの静寂主義運動の神秘主義思想と関連づけられたりしているが、どちらも根拠は薄い。

ワシーリイは庶民階級の出だったが地域の有力貴族の庇護下で教育を受け、司祭となり、聖地巡礼を行い、大主教に推薦されたのであって単純に庶民派と評価できるわけではない。ただ彼の天国論には庶民的な心性と遠い聖地や異国への憧憬が結び付いているのは認められよう。

第5節　大主教の白頭巾

ロシアの府主教以上がつけている白頭巾を、最初に被ったのはワシーリイとする伝説

が近世ノヴゴロド地方に広まっていた。白頭巾は正統キリスト教信仰のシンボルとして、ローマ、コンスタンチノープルを経て神の命で14世紀にワシーリイの手に伝えられたというもので、伝説は15世紀末に物語化された。

ワシーリイはノヴゴロド大主教の地位と信仰の正統性の象徴たる白頭巾をコンスタンチノープルから受け取ったという点に伝説の核心があるが、その背景にはワシーリイらが府主教や総主教から十字聖衣を与えられた事実がある。十字聖衣と結びついた白い被り物はノヴゴロド民衆に強い印象と誇りを与え、白頭巾伝説を産み出した。

西ロシアを併合したリトアニアは独自の府主教座を創設すべくビザンツに働きかけ14世紀前半に一時成功したが、モスクワの活発なビザンツ外交で閉鎖される。ガーリチ府主教座が閉鎖された直後にワシーリイはステファン代表団をビザンツに送り、ハギア・ソフィアのドーム修復基金を献金してノヴゴロド教会の立場の強化をビザンツ教会に働きかけている。

ノヴゴロド大主教は12 世紀以国家の政治的シンボルであり、ノヴゴロド人は独立教会の支持を求めて再三コンスタンチノープル総主教を訪れた。14世紀の白頭巾伝説もそうした外交努力のなかで生まれた。ノヴゴロドの巡礼記がコンスタンチノープルの「聖都」性や宗教的中心性を強調するのも、実はモスクワ宗教的中心とする理念の否定を含んでいた。

第6節　死と埋葬

1352年にプスコフで猖獗したペストを鎮めるため、ワシーリイはプスコフ諸教会での祈祷と市内での十字架行進を行ったあと、ノヴゴロドへの帰路で発病して死亡し、遺体はソフィア大聖堂の床に葬られた。

1945年に考古学者モンガイトは十字架つきの祭衣をつけた一人の大主教の石棺をみつけ被葬者をワシーリイと同定し、人類学者のゲラシモフはこの遺骨からワシーリイの胸像を復元した。しかし最近のヤニンの研究でこの結論は疑われている。

第4章　貴族オンツィフォルの一族

本章では、ネレフスキー発掘で屋敷地が発見されたミーシャ=オンツィフォル家を例に、ノヴゴロド貴族の政治活動の特徴や経済的性格を紹介するとともに、貴族を中心に機能している都市国家全体の政治的な仕組み、それを支える社会組織のあり方にも可能な限り目を向けてノヴゴロドにおける貴族支配の構造をさぐる。基本的な材料はノヴゴロド年代記、白樺文書、考古学資料、証書、土地台帳である。

第１節　ミーシャ=オンツィフォル家の系譜

活発な政治活動を展開したミーシャ=オンツィフォル家については年代記の記述も多く、13世紀末から15世紀初めまで5世代の当主名は年代記だけで追跡できる。ユーリイ・ミシニッチ、ヴァルフォロメイ・ユーリエヴィチ、ルカ・ヴァルフォロメヴィチの3人、オンツィフォル・ルキニッチ、ユーリイ・オンツィフォロヴィチの5代である。

だが一族が所有する3つの屋敷地から出土した白樺文書により、ユーリイの子ミハイル・ユーリエヴィチ、ユーリイの孫アンドレヤン・ミハイロヴィチとニキタ・ミハイロヴィチまでの代が明らかとなり、また別の遺言状の発見でユーリイの曾孫オリーナの代までが明かになった。

年代記、白樺文書、遺言状のより13世紀末から15世紀後半までおよそ170～180年、8世代の一族の当主が確認された。一族は14世紀のまる一世紀間はネレフスキー区の代表貴族として次々に市長職をつとめ、15世紀前半から徐々に政治の舞台から退いていった。

第2節　区が市長を送り出す

区はノヴゴロド市の自立性の強い地域単位で14～15世紀には5区が存在した。区は独立的な政治単位として権力を目標に相互に争ったり連合したりしたが、その背後には区を自分の勢力基盤とする区独自の有力貴族が存在し、有力貴族は区と区民に支持されて市長職を他区と争った。

市長を長とする市政府は5区が恒常的に軍事、外交、行政など基本的国家機能を分掌することで成り立っていた。ノヴゴロド軍は区単位で編成され、外交も5区の連合、司法行政を含むあらゆる国家機能も5区の連邦制で執行され、それゆえ国家文書や条約も市長や大主教とならんで5区の名で発給され5区の印章が付された。

区は自己完結的な地域共同体で独自の財政、土地、区長、区民会、軍事組織、印章、守護聖者、修道院をもった。市が「大ノヴゴロド卿」を称したのに対し、区も「大スラヴェンスキー区卿」と称する半国家だった。

区は貴族、有産市民、商人、庶民の基本４身分のほか、貴族や有産市民の屋敷内の家人、召使い、奴隷など不自由身分も含み、区の社会編成は市全体の社会構成と同じあらゆる階層を含んでいた。ノヴゴロドの都市空間に階層の住み分けはなく、全区が均質的社会編成をもっていた。

第3節　ネレフスキー区

ミーシャ=オンツィフォル家の拠点はクレムリンの北ネレフスキー区の三本の通り一帯に広がり、少なくとも周辺３教会が一族と密接な関係をもっていた。一族の3教会が分布する2、3ヘクタールほどの都市空間に15ほどの屋敷地を所有し、一族の直接の支配を及ぼしていた。

屋敷地群には領主の家族とともに家令、奴隷、下僕のほか小商人、僧侶、手工業者、借地借家人など総数は300～400人の住民がさまざまな形で隷属していた。一族に支配され保護されているこれらの人々がネレフスキー区における一族の政治勢力の中核をなし、他区との権力闘争では一族を支持する地域住民の中心となり、軍事行動では一族の私兵となった。

第4節　市長オンツィフォル

共和制の成立で市長は市民の選挙制となり、13世紀末に１年任期制が成立すると同時に終身の区代表貴族による参議会が創設され、14世紀半ばには参議会の貴族全員の市長（1人が現役市長）となる。その後も市長数は増え任期も半年制になるなど、参画貴族数を増やして権力闘争を緩和しようとするが、現役市長制だったため闘争の抑制効果はなかった。

公がノヴゴロドから姿を消し国家権力の重要要素でなくなった14世紀前半はノヴゴロド政治史の転換期だった。市長の政治的比重が著しく増大し、貴族階級内の権力闘争や貴族と庶民の社会的対立が尖鋭化して一種の危機状況が出現する。これを打開するための改革を実行したのが、ネレフスキー区のオンツィフォル・ルキニッチだった。

オンツィフォルはスウェーデン軍の侵入に関わる功績などで1350年に権力を握り

1354年までに市長制改革を実行した。5区の有力貴族たちの対立を解消するため区代表貴族全員の複数市長制とし、またソフィア側と市場側を均衡させるためスラヴェンスキー区市長を2名とし、６人市長制とし、改革の新体制と同時に自分で身を引き他区の代表全員の退陣を要求し全く新しいメンバーで6人市長制を発足させた。

第5節　領主オンツィフォル

ノヴゴロド貴族の本質は都市貴族だったが、都市と貴族の結びつきは政治活動で検証できるものの彼らの商業活動は見られない。15世紀末の土地台帳研究で支配的貴族が例外なく土地領主だったことが明らかになったが、貴族の商業活動を立証する材料は出ていない。

オンツィフォルの息子ユーリイがトルジョーク近くの領地メドノエ荘園を売った一通の羊皮紙文書が残っている。この所領には領主が直接所有する多くの家畜、穀物、農民への債権などが記録され、一族の直営地だったことが明らかである。息子が売却したこの所領を父親のオンツィフォルはまだ懸命に経営していた姿を示す彼の白樺の手紙が見つかった。執事にトルジョークの農園に行き穀物倉の管理、馬の肥育、打穀の監督を行うよう命じた手紙で、農民への穀物貸付に言及する点まで譲渡文書と符合する。

屋敷地で発見された一連の白樺文書は一族の所領経営や農民支配の一端を明らかにする。農民の隷属形態は多様で所領は分散的である。関係文書の大部分は属州各地の所領管理人が領主に送ってくる農事や農民支配に関する報告、照会の手紙、農民の都市領主への直訴状などである。白樺文書は土地経営以外の一族の経済活動を証言していない。

第6節　ヴォルガ川の河川賊

14世紀前半から15世紀の初めノヴゴロド貴族の一部は奴隷、家人、郎党を動員し、ヴォルガ・カマ川流域の都市や商船を襲い、奴隷や交易商品をを奪う略奪活動を行った。この活動には相当数の武装集団、大型船、食糧準備など資金と人的動員力が必要で、貴族が組織したものだった。ルカ、オンツィフォル、エシフなどの参加を年代記は短く伝えており、一族もつねに大土地領主だったわけではない事実を示唆する。

14世紀のノヴゴロド貴族は毛皮の宝庫だった北ドヴィナ流域をすでに所領化しリス毛皮を大量に入手して対西欧交易の輸出産品の供給者となって富を引き出していた。ノヴゴロド貴族の略奪運動は、ドヴィナを支配して主要輸出商品を掌握したノヴゴロド貴族が、ハンザ貿易だけでなくモスクワが発展させはじめたヴォルガ経由の南方貿易からの利益にも与ろうと試みた暴力的介入だった。14世紀にはサライや黒海イタリア植民都市などの活発な商業活動と連動し、ヴォルガ水路交易が復活してロシア産の毛皮や蝋がモスクワ商人やイスラム商人の手で運ばれたからである。

第7節　余生は修道院で

中世ノヴゴロドの修道院の建立者の中心は貴族だった。市政府、大主教、区、街区による建設でも貴族の主導性が明らかだった。修道院所領は貴族的土地所有の延長上にあり、建設者は寄進財産への一定の権利を留保した。特に貴族が私財を投じて建立する小規模修道院は財産の私的担保にもっとも適し、一族もネレフスキー区郊外にコルモフ修道院を建立した。

貴族にとって修道院は養老院、政治的危機の際の避難所、大主教権力に守られた聖域内に土地や財産を担保しておく場所で、生命と財産のアジールとして機能した。コルモフ修道院を建設したのは14世紀末のユーリイ時代で、15世紀の土地台帳で見ると所領

規模は118の修道院中28番目、隷属農民60戸、農民世帯主84人だった。
この規模から推してコルモフ修道院は一族関係者十人程度が老後の隠居生活を送っていた程度と思われる。大部分のノヴゴロド修道院は個住修道院で、数人の修道士が自分の財産や土地など私的財産を所有しながら生活しており、財産を教会の保護下に置きながら事実上は俗界の生活に近い暮らしを続けられる場所だった。

第5章　「女市長」マルファ

本章では、共和制の末期にノヴゴロド政治をリードした反モスクワ派の代表者、ボレツキー家の女当主マルファを取りあげる。最終末のノヴゴロドとモスクワの政治的葛藤をたどり、ノヴゴロド滅亡の歴史過程に見えかくれするマルファとボレツキー家の姿を描いてみる。情報源はモスクワとノヴゴロドの年代記、そのほか2、3の材料である。

第1節　「自由の闘士」それとも「裏切り貴族」

ゲルツェンはノヴゴロドの併合をその後のロシアの運命を決定した歴史の分岐点とし、ノヴゴロド民会の鐘をロシア史のあり得べきもう一つの歴史的進路の象徴ととらえた。19世紀を通じてマルファは自由のために専制と戦った戦士と考えられ、1862年の建国一千年記念碑上でロシア史の一ヒロインになった。
ブロックハウス=エフロン百科事典はマルファがリトアニア派の指導者になったのは自由への愛着と専制への憎悪ゆえだとするが、スターリン時代のソヴェト大百科はボレツキー家がモスクワの統合政策に最後まで反抗した反動貴族の指導者で、リトアニアへの服従という裏切りと陰謀に終始した封建貴族と解説する。

第2節　マルファの登場

マルファの夫イサーク・ボレツキーは15世紀の30～50年代で政治舞台に立ち60年代末までに死んだ。マルファは1430～40年代に結婚し、2人の男子をもうけ1450年代末から60年代末までに未亡人になった。従ってマルファがボレツキー家の財産を受け継ぎ、政治舞台に登場する準備をととのえたのは1450年代の末から1460年代である。
モスクワ国家内の分離勢力と結んで大公を牽制しようとする政策はワシーリイ2世から厳しい軍事的復讐を受け、1456年のヤジェロヴィツ条約でノヴゴロドは伝統的自治権や外交権さえ制限され併合への一歩となった。反動としてノヴゴロドではリトアニア派の動きが活発化し、勤務公招聘、リトアニア大公との交渉、騎士団・ハンザ・プスコフとの同盟の追求など、ヤジェロヴィツ条約の実質廃棄が政治目標となった。
マルファが前面に出て政変をリードするのはモスクワとの協調路線をとった大主教イオナの死後、1470年である。リトアニア派の僧ピーメンは、後継大主教フェオフィルをモスクワ府主教ではなく、合同派府主教グリゴーリイのもとで叙任させ、リトアニア大公と連携することを民会で強力に主張した。民会は割れたがリトアニア派が勝利し、ノヴゴロド宗主権者をリトアニア大公カジミエラスに移し、新任大主教をグリゴーリイのもとに送ることを決定した。カジミエラスとの条約はマルファの長男ドミートリイ・ボレツキーの参加する代表団が締結した。

第3節　運命のシェロン川

リトアニア派がカジミエラスと結んだ1471年条約の要点は３つあった。第１は、代官が正教徒であること、大公は正教信仰に介入しないこと、カリトック教会を建設し布教

しないことなどカトリック信仰の明確な拒否である。ただノヴゴロド大主教の叙任を受ける場所については「ノヴゴロドの自由」と選択の余地を残した。

第2は、ヤジェロヴィツ条約でモスクワ公国に奪われたノヴゴロドの伝統的権利を回復することで、日常行政にモスクワ大公の印章を強制し、民会の上級裁判権を奪い、モスクワ大公自身がゴロジシチェで行なう裁判を設定した、などの諸点を旧に戻すことだった。

第3は、宗主権の承認と引き替えにモスクワとの軍事的対決に際してリトアニア大公からの全面的な軍事援助を得ることで、ノヴゴロドの軍事的弱点から判断してこの成否が同盟関係を東から西に鞍替えする上での最大のポイントだった。条約はモスクワの侵入に際してはカジミエラス自らが「リトアニアの全軍を率いて」守ると約束していた。

しかしイワン3世は「正教への裏切り」を名目に全ロシアの動員に成功したが、リトアニア派は期待したカジミエラスの軍事援助を得られず1471年の戦争は敗北した。ノヴゴロド軍は内部対立、市民軍の脆弱性、外交上の孤立、リトアニアの無援助のもとで戦いに完敗し、ドミートリイ以下4人のリトアニア指導者が処刑された。

第4節　ボレツキー家

ミーシャ=オンツィフォルー族と入れかわるようにネレフスキー区の政治舞台に登場するのがボレツキー家で、マルファの夫イサークは15世紀の20～50年代に市長職に就き、長男ドミートリイは1470年に市長になる。マルファ邸はネレフスキー発掘に近いボルコヴァ通りにあり、ボレツキー家は名門オンツィフォルー族の血筋だった可能性が高い。

ソロヴェツキー修道院の創建者ゾシマがマルファ邸を訪ねた伝説は、ボルコヴァ通りのマルファ邸がリトアニア派貴族たちの集うサロンであった一場面と、ボレツキー家が全土に所有する所領を差配する場所でもあり、マルファと土地を争う聖界領主がやってきて交渉に成功し、首尾よく寄進状まで手に入れた瞬間を写しとめている。

マルファは5州だけで約1万人の隷属民を抱えていたが、所領は北部オボネジエに集中し収入の85％が輸出商品となるリス毛皮だった。ボレツキー家は西欧輸産品の宝庫だったドヴィナ、ポモリエにも数千カ所に及ぶ農地、製塩所、狩猟地、漁業地を所有していた。モスクワは以前から執拗にこの宝庫の奪取を試みていたから、そこに北方植民地の開発者だったマルファー族が反モスクワ派の中心になる背景があった。事実、ザヴォロチエの開発を進めた代表的な門閥は例外なくリトアニア派貴族だった。

第5節　イワンの「平和的」訪問

イワン3世は1475年にノヴゴロドを訪問し2カ月滞在した。目的は公の直接裁判で数家族の危険な貴族を排除することだった。ノヴゴロドに着くと狙った貴族を断罪できる訴訟事件を選び、ゴロジシチェで大公自身が行なう裁判にかけ、マルファの次男フョードルを含むリトアニア派の最有力貴族6人を拘束しモスクワの土牢に押し込めて2度と解放しなかった。

このあと1月以上イワンはノヴゴロド貴族の招待に応じて彼らの館での宴会に出席した。モスクワ派貴族たちは身と財産の安全を図ろうと競って大公を館に招いて贈り物をした。贈り物はどの貴族も同じ品目でノヴゴロドの輸出品かそれを対価に西欧から輸入する商品だった。モスクワ派貴族の富の根源がボレツキー家などリトアニア派のそれと本質的には少しも変わらないことを示している。

第6節　鐘の音は鳴り止んで‥‥

1477年春、ノヴゴロドの2人の下級役人がモスクワで大公を従来のゴスポディンでなく「ゴスダリ」と呼び掛ける文書を提出した。イワンはこれを利用して、ゴスダリとしての完全裁判権やヤロスラフ館跡の明け渡しを要求し、民会が拒否すると大軍を動員して宣戦を布告し、市を完全に包囲した。ノヴゴロドは戦わずに降伏し、民会の解散と市長制の廃止で共和制都市は廃絶された。マルファほか5人は全財産を没収され身柄はモスクワに送られ、民会の鐘もモスクワに運ばれた。

共和制滅亡のあとイワンは20年余をかけてノヴゴロドの貴族、有産市民、修道院、大主教から土地を没収し、家族をノヴゴロドから物理的に排除して大公の住民と入れ替えた。徹底した没収政策の結果、旧貴族の土地は文字どおり完全に消滅し、大主教領の大部分と修道院領の78％が没収された。マルファ一族の排斥に始まった併合は、ノヴゴロド全支配層からの土地没収と物理的排除で終わった。

第7節　エピローグ

ノヴゴロド貴族が歴史から姿を消したことはロシア史に影響を与えた。貴族が国家を代表する政治市民、為政者の資格をもつ真の市民だという意識は政治文化の領域に属するが、そうした政治文化がロシア史から消えたからである。ノヴゴロド貴族の廃絶は、地方を代表する社団としての、集団的に王権を制約する貴族の生まれる可能性を摘み取り、結果としてモスクワ国家には地方を政治的に代表し、集団的特権意識によって結合した身分としての貴族が育ちにくい歴史的環境がうまれた。